



乱

*Tsunabuchi
Kenjo*

綱淵謙錠

The background of the entire cover is a dense, repeating floral pattern in a light gray color. The pattern consists of stylized flowers, leaves, and scrolling vines, creating a traditional Japanese aesthetic.

乱

5h

綱淵謙錠
Tsumabuchi Kenjo

中央公論社

らん
乱

一九九六年 二月一〇日初版発行
一九九七年 三月一〇日四版発行

著者 綱淵謙錠
つなぶち けんじょう

発行者 嶋中 鵬二

発行所 中央公論社

〒104 東京都中央区京橋二-八-七

電話 販売部 (〇三)三五六一四三一

編集部 (〇三)三五六三-三六六六

振替 〇〇一二〇-四一三四

印刷・製本 大日本印刷

定価はカバーに表示してあります。

落丁本・乱丁本はお手数ですが小社販売部宛お送り下さい。
送料小社負担にてお取り替えいたします。

乱
(らん)
目次

第一章	異人斬り	7	第九章	剣とペンと	119
第二章	サムライとスフィンクス	21	第十章	軍事顧問団来日	133
第三章	ナポレオン三世	35	第十一章	横浜仏語学校	151
第四章	巴里廢約	49	第十二章	仏式三兵伝習始まる	162
第五章	五洲の夢	63	第十三章	大坂の將軍謁見式	177
第六章	メキシコ遠征	76	第十四章	倒幕派敗北す	193
第七章	四国艦隊出動す	92	第十五章	アラビア馬贈呈式	213
第八章	日仏提携への道	105	第十六章	パリ万国博覧会	226

第十七章	王政復古	241	第二十五章	江戸の冬	365
第十八章	兵庫開港	257	第二十六章	江戸城揺れる	382
第十九章	備前兵発砲す	273	第二十七章	秘密会談	396
第二十章	滝善三郎の死	288	第二十八章	軍事顧問団解約	413
第二十一章	艦長プティルトウアール	303	第二十九章	ロツシユ帰国す	428
第二十二章	葬送行進曲	318	第三十章	脱走者の群れ	444
第二十三章	パークス襲われる	334	第三十一章	謎を秘めた写真	459
第二十四章	天皇、外国公使に会う	349	第三十二章	仮装舞踏会	477

第三十三章	法外な報酬要求	493	第四十一章	五稜郭入城前夜	628
第三十四章	揺れる仙台藩	509	第四十二章	五稜郭入城	641
第三十五章	北航の夢	526	第四十三章	清水谷知府事の箱館退去	652
第三十六章	ブリュネのスケッチを追う	542	第四十四章	松前城陥落	669
第三十七章	箱館裁判所	559	第四十五章	三上超順の最期	681
第三十八章	箱館府の苦難	576	*		
第三十九章	松前藩クーデター	591	解説	磯貝勝太郎	693
第四十章	館城新築	516			

乱

(らん)

第一章 異人斬り

一

この日の天候は、残念ながら、記録としては遺^{のこ}っていない。夜に入^いって雨が降^ふったようであるから、日中は薄く曇^{くも}っていたと考^{かん}えてよいだろう。したが^がつて、必ずしも遠^{とほ}乗りに最^ひ適^ふの日^ひ和^わとはいえなかつた。

へこの日^ひというのは、文久三年九月二日（洋曆・一八六三年十月十四日）、時刻は昼飯^{ひるめし}どきを少し過ぎたところという。

場所は武州久良岐郡井戸ヶ谷村——現在の地図でいえば、神奈川県横浜市区井戸ヶ谷下町^{しもまち}から京浜急行井戸ヶ谷駅^{いどがやえき}付近の往還を、一人の外国人将校が遠乗りにでも出かけたらしく、馬首^{ばしゅ}を程ヶ谷^{ほどがや}（保土ヶ谷）方面に向^{むか}けて、ゆつくりと駆^かけていた。

この外国人、いまのことばでいえば、なかなかスマートでハンサムだった。眉目秀麗というやつで、鼻筋が通

り、何といつても、鞍の上で軽くリズムをとっている全身から、若さがみなぎり溢^{あふ}れていた。おそらく二十歳を越えたといつても、二十二歳とまでは行^いつていないであろう。その若さが颯爽^{さつそう}とした騎乗^{きじょう}ぶりに魅力^{みんり}を添^そえていた。

いうならばそれは、へ人目を惹^ひく姿であつた。これをヨーロッパの都市の真^まン中で走^はらせたのなら、道往^{みち}く人々は、とくに若い女性たちは歓声^{かんせい}を挙^あげて見惚^{みと}れたであらう。ところがいま、この横浜村から二キロほど離れた、人通りも全くない往還^{わんげん}では、これに歓声^{かんせい}を挙^あげる人間もいなければ、魅了^{めりよう}される町娘^{まちぢやう}もいなかった。

しかも、このような人目を惹^ひく外国の青年将校が、単騎でこんな田舎道を走^はっているということが、この文久三年九月という時点では「不思議」というしかなかった。連れがもう二騎いたが、それらはずうつと先に行き、この若い将校だけが取り残されたのだ、ともいわれるが、少なくともこの事件^{じけん}が起きたとき、かれがただ独^{ひとり}りとい^いった状況で馬を走^はらせていたことは事実である。

当時、日本政府（幕府）が米蘭露英仏などと結んだ修好通商条約では、各条約国人の開港場における遊歩^{ゆうぽ}の規程として、神奈川（横浜）は「六郷川筋^{ろくかうがし}を限^{かぎ}とし其他は各方^{おほよそ}へ凡^{およそ}十里（四〇キロ）」と決められていた。したが

って、いまこの外国人士官が馬を走らせている井戸ヶ谷村はその遊歩区域内にあることは確かであったが、当時の日本の国内情勢からいって、たとえ白昼であれ、外国人がただ一人で出歩くというのは「無謀」の一語に尽きた。幕府がいちばん困惑し、頭を痛めたのも、このような「無謀」な外国人の行動であった。

安政五年（一八五八）六月における日米修好通商条約の無効許調印以後、万延元年（一八六〇）三月三日の桜田門外の変や、文久二年（一八六二）一月十五日の坂下門外の変といった、幕閣要人の襲撃に並行して、過激攘夷派による異人斬りの黒い旋風が吹き荒れていた。

その旋風はまず安政六年（一八五九）七月、ムラヴィヨフを乗せて品川に來航したロシア軍艦に乗り組んでいた士官一名と水夫一名の暗殺から吹きはじめた。

それに続いてフランス領事館の下働きをしていた清國人が横浜で殺され（安政六年十月）、イギリス公使館雇いの通詞伝吉という日本人が、仮公使館となっていた東禅寺の門前で殺害された（万延元年（一八六〇）一月）。

しかもその翌月には、横浜に上陸したオランダ商船の老船長デ・ボスと乗組員デッケル（イギリス人）が殺害され、九月には三田の済海寺を住居としていたフランス公使館の旗番ナタール（イタリア人）も襲われて負傷し

た。さらに同年十二月五日の夜には、アメリカ公使館通弁官ヒュースケンが、芝の赤羽根接遇所から麻布善福寺のアメリカ公使館に騎馬で帰る途中、三人の日本人武士が前後を護衛していたにもかかわらず、麻布の古川端で暗殺されるという事件が起きて、日本政府を震撼させた。

これらの異人斬りの犯人は、いずれも攘夷派の浪人たちだといわれた。しかし、被害者の数は前後八人にも達したというのに、その加害者は一名も逮捕されなかった。

それに、ヒュースケンの殺される一カ月前、十一月五日の深更に、当時、日本との通商条約締結のために來航していたプロシャのオイレンブルクと外交交渉をしていた外国奉行の堀織部正利熙が、突然引責自刃するという事件もあったりして、「万延」という年は攘夷が開港かの騒ぎのうちに、一年足らずで「文久」と改元になった。

これは従来採ってきた井伊直弼の強硬路線を排して、「公武一和」という新路線に切り換えた幕府の願望を表現する年号だったかもしれないが、攘夷の火の手は一向に衰えぬどころか、一層猖獗に向う一方で、品川東禅寺のイギリス公使館で、文久元年（一八六一）五月と翌

二年（一八六二）五月の二度にわたって、攘夷派による館員殺傷事件が起き、しかも二度目の犯人は公使館を警衛していた松本藩の伊藤軍兵衛という武士だったりして、幕府は異人斬り対策にほとほと手を焼く有様だった。

幕府はすでに文久元年四月、旗本の中の腕利きから選りすぐった「別手組」という警備隊を新たに組織し、各国公使館や領事館、その他、居留地の外国人の保護警衛に当らせ、諸藩にも命じてそれを補強させた。同時に、各国公使や領事を通じて、外国人自身の居留地外への遊歩の自粛を要請した。とくに東海道は諸侯の往還が頻繁で、外国人とのあいだに不測のトラブルも起きがちなので、できるだけ東海道の通行は見合わせるように、と絶えず警告を忘れなかった。はじめ幕府は下田にかわって「神奈川」を開港場に指定したのに、対岸の横浜村を開いてそれに当てたのも、神奈川が東海道の宿駅の一つだったからで、貿易のため来航した外国人をなるべく大名行列や攘夷派浪人と接触させないための配慮からであった。

ところが、第二次東禅寺事件のショックがまだ収まらぬ同年（文久二年）八月二十一日、いわゆる「生麦事件」が起きた。東海道の川崎宿と神奈川宿のあいだの生麦村（現横浜市鶴見区生麦）で、江戸から帰る島津久光の供揃

いをしていて薩摩藩士の手によって、上海から観光のため来日していたイギリス人リチャードソンが殺害され、横浜在留のイギリス人マーシャルとクラークが重傷を負わされたのである（香港のイギリス人の妻ボラデルだけは帽子と頭髮の一部を切られただけで、負傷を免れた）。

この事件によって、今年（文久三年）の七月に鹿児島湾でイギリスと薩摩のあいだで戦端が開かれ、現在なおこの事件が係争中であることは、横浜在留中の外国人なら知らぬ者のない事実である。

それに薩摩藩の起こした生麦事件は、他藩の攘夷派を大きく刺戟した。生麦事件から五ヵ月ほどたった十二月十二日の夜（この年は八月に閏があった）、品川御殿山に建築中のイギリス公使館が焼打ちされたが、これは「薩摩に負けるな」という長州藩の過激攘夷派の仕業だ、ともっぱらのうわさだった。じっさい、在日外国人を狙う過激派の鋭い目がどこにあるかわからぬという状況は、依然として続いているのである。

したがって、いま、この東海道の生麦村にも程近い程ヶ谷宿の近辺を（ちなみに、東海道五十三次は江戸の日本橋を起点に、品川・川崎・神奈川・程ヶ谷・戸塚・藤沢と続いて行く）、一見して将校とわかる軍服姿の外国人が、別手組はおろか、部下の兵隊さえ連れずに、ただ独りで

馬にトロットを踏ませてゆったりと走っているのは、いったいどんな意図から出た行動なのか、不思議というしかない光景だった。

たしかに攘夷派の跳梁ちやうりやうにより、〈暗殺〉という黒い旋風は京都に飛び火し、去年から今年にかけて京都を殺戮の埜塙るつぼと化しており、それだけ江戸や横浜における攘夷派の暗躍の影は薄れたともいえようし、また、將軍家茂を上洛させ、天皇の賀茂社や石清水八幡宮への行幸に随従させて、「今年の五月十日をもつて攘夷決行の期日とする」と布告させるまでに盛り上がった攘夷派の勢力も、五月十日を期して下関海峡を通過する外国商船や軍艦に発砲を開始した長州藩がアメリカやフランスの軍艦に報復砲撃されて砲台を占拠されるといった敗戦の苦みを味わったり、薩摩藩は薩摩藩で、イギリス艦隊の艦砲射撃によって多大な損害を蒙こうむったりして、〈攘夷〉が決して口でいうほど容易ではないことを痛感させられることで、一つの頓挫を來たしていた。

しかも、攘夷祈願と倒幕親征のための大和行幸をもつて頓挫した昔日の勢威挽回を狙った攘夷派も、これを忌避した天皇の意向を体して行われた八月十八日の政変で京都から一掃され、三条実美さねとみたち七卿は長州藩攘夷派に護衛されて長州へ落ちて行つた。

このような攘夷派の退潮は、一面では在日外国人たちの行動を大胆にさせたが、京都を追放された攘夷派がふたたび江戸や横浜へ逆流し、さらに絶望的な行動に出ないという保証はなかった。

いずれにしても、在日外国人に油断は禁物だった。

いま、この井戸ヶ谷村にさしかかった馬上の外国人將校の行動一つにしても、なぜこんな人通りの少ない往来をこんな無防備な態勢でこの行動に出ているのか、これがその外国人自身の無知から発した〈大胆〉な行動なのか、それとも日本の過激攘夷派の兇刃を甘くみての〈無謀〉な行動なのか、見る者に大きな戸惑いを与えずにはおかない、というのが、現下の日本の複雑微妙な状況を物語るものであった。

あるいは、下関で長州藩と戦い、前田浜に上陸して、日本の攘夷派の総元締といわれた長州藩の備砲や兵器・火薬庫などを破壊してきた経験のある軍人で、「日本の過激派恐るるに足らず」と結論づけた末での、〈自信〉ある行動だったかもしれない。

ところが、この日この時、かれの行く手にどこからともなく、三人連れの武士が立ち現れたのである。まるでその外国人將校のやってくるのを予測して、待ち構えていたみたいな現れ方であった。一人は頭抜けて背が高く、

赤い深編笠を冠^{かぶ}つて赤い袴を着け、羽織は着ていなかった。他の二人は中背で、髪を大髻^{おおたぎ}に結い、ともに青い野羽織を着用。そして三人とも、みるからにがっしりした拵^{こしら}えの刀を腰深く帯びている。

一見して、それが攘夷派の浪人であることが知られた。ただし、その外国人にそれが認識できたかどうかはわからない。外国人は同じ速さで馬を進めて行った。両者の間隔がみるみる狭^{せば}まった。

二

惨劇は一瞬にして終った。

はじめ三人の浪人らしい武士は馬に道をあけ、右側の路傍^{ろぼう}に一列に並んで、その外国人士官を出迎えるように佇^{たず}んでいた。

浪人たちまで三間（約五・五メートル）ほどの距離に近づいたとき、アラビア馬の両耳が危険を予知して素早く動き、ピタとうしろに伏せた。その瞬間、背の低いほうの武士が一人、「ワーツ」と叫び声をあげると、馬の前に飛び出して、両手を拡げて立ちはだかった。同時に、背の高い武士が深編笠を馬の顔めがけて投げつけ、三人目の武士とともに馬側に駆け寄って来た。

馬は高いいななき、後脚で棹立^{さおだ}ちになった。当然、乗り手は力いっぱい手綱を引いて、馬を鎮めにかかった。

そのとき、奇声とともに背の高い武士が跳躍し、その跳躍とともに抜刀して、乗り手の手綱を引きしぼっている両腕をもろに切り落した。

腕の冴えというのであろうか。その武士は跳躍が下降動作に移ったとき、片手斬りに右側の手綱を斬り上げつつ着地していた。革の手綱はそれを握っていた乗り手の右腕とともに空中に舞い上がり、急に狂気のように走り出した馬の鞍の上に落ちて、二度三度転々と跳ね上ったのち、路傍の草むらに消えた。すでに鞍の上に乗る手はなかったわけだ。

乗り手は長い悲鳴の尾を引いて、落馬していた。地響きとともに道路上に叩きつけられた青年の長靴^{ちやうか}のかかとで、銀の拍車が涼やかな音をたてて回転した。青年は落ちた反動でクルリと仰のけに転がると、腕を失った両手を本能的に突き出して、襲撃者の次の打撃を防ごうとした。その両手の先端から、二筋の赤い奔流が噴き出していた。

さきほど馬のうしろに廻った武士が、それまでに抜いていた刀を振り上げると、青年の頭部に切りつけた。そこに馬前に躍り出た武士が駆け寄り、ほとんど死体とい

つてよい軍服姿の青年の体を斜に切った。その打撃で青年は絶命したらしく、全身から力が抜けた。

すべては終わった。

三人の武士はそれぞれ刀を強く振って刀身の血を払うと、腰をひねって鞘に納めた。鏗音がひととき高く聞えた。一人が地上の深編笠を拾って背の高い武士に渡し、それを受け取った武士はゆっくりと笠を冠って緒を結んだ。それから三人は、さきほどやって来たらしい程ヶ谷とは反対の、弘明寺村のほうへ立ち去った。

この兇行の目撃者が現れるのは、このころからである。武州久良岐郡井戸ヶ谷村百姓広七という者のへ申口(供述書)として、次のことが遺っている。

へ当月二日昼飯後屋敷際畑地に於て而農業罷在候 処近辺字下之前に於て而怪敷物音致し候間不審に存畑地より木蔭越しに見候処外国人乗居候馬保土ヶ谷宿の方へ駈参り外国人者右場所に倒れ罷在凡疋丁程隔侍三人程ヶ谷宿の方より罷越候様子にて而老人者丈高く赤き色之深笠を冠り羽織無之赤色之袴着用兩人者中丈大鬚之男青色之野羽織を着用通行致し候に付前書外国人を及殺害候者右之者共之仕業に可有之と存候へ共及殺傷候節見留候儀にも無之候へ共不取敢右始末村役人共へ相届候儀に御座候

現在、この事件については『統通信全覽』(外務省蔵)類聚之部「暴行門」殺傷「仏国」に「仏国士官カミュス井戸ヶ谷村ニ於テ遭害一件」という記録があり、右の証人供述書はそれに収録されている(探索手続書)の冒頭にある。

この『統通信全覽』というのは幕府が諸外国と取り交した往復文書の控えである。したがって現在では、この事件についてこれ以上詳細な報告を求めないのが実情である。以下、この記録を中心に、この事件の経過を追ってみることにする。

この事件の被害者は、右の記録にもあるように、へ仏国士官カミュスである。正確にはアンリ・カミュ(Henri Camus)。第二次大戦後、「異邦人」、「ペスト」などで日本にも知られたフランスの小説家カミュと同じ綴りである。それを幕末には「ヘカミュス」と読んでいた(もっとも、後段で出て来るはずだが、「ヘカミイ」と書いてある記録もある)、したがって、以下、引用文以外は「ヘカミユ」と書くことにする。

このカミュがフランス陸軍のどういう部隊に所属し、階級は何であったかについては、『統通信全覽』のこの一件記録からは「亜国第三バタイロン一士官ロイテナント官カミイ」とか「亜刺比亞隊之将官モンシユール、

カミス」といったくらいしかわからない。当時は「亜国」といえばアメリカの意味だったから、ここは「仏国」とあるべきであろうし、「モンシユール、カミス」は「*Monsieur Cannus* (カミュ氏)」のもりであろう。

ただ、ここで重要なのは、第三バタイヨン (bataillon) 大隊) のロイテナント (Lieutenant・陸軍中尉) という肩書であろう。そして、「亜刺比亜隊之将官」とあるについては、いささかの疑問が残る。というのは、大塚武松著『幕末外交史の研究』(昭42・5新訂増補版、宝文館)では、「横浜駐屯の仏国亜非利加聯隊の分遣隊附中尉カミュ」となっているからである。したがって、これらを総合してみると、「フランス陸軍アフリカ連隊 (*Regiment d'Afrique*) 第三大隊・元アラビア分遣隊付 (現ヨコハマ駐屯) 陸軍中尉アンリ・カミュ」といったところであろうか。

なおこれに、洞富雄氏著『幕末維新期の外圧と抵抗』(昭52・3、校倉書房)によってもう少し補注するなら、このアフリカ連隊というのは「*Chasseurs d'Afrique*」の連隊だったという。

文久二年八月の「生麦事件」の賠償問題が長びいているうちに、それと並行して、英仏両国は「外国人居留地は外国軍隊の護衛下に置くべきだ」と、横浜防衛権の委

譲を幕府に要求し、文久三年(一八六三)五月十八日(洋暦・七月三日)、幕府は英仏守備兵の横浜駐屯を容認せざるをえない羽目に立ち到った。

この日、幕府は若年寄酒井飛騨守忠毗の名で「*当分横浜居留地辺警衛之儀*」を容認する旨の書翰を、イギリス水師提督キューバーとフランス水師提督ジョーレスに送っている。

これは英仏両国の横浜防衛権が確立したことを意味し、「*当分*」という時間的制限があり、「*横浜横居留地辺*」という局部権限ではあったが、事実上、幕府は独立国としての主権をみずから放棄したといわざるをえなかった。

その結果、幕府は英仏両国にその軍艦を横浜港に恒久的に碇泊せしめる口実を与えることになり、当初はフランスがその主導権を握っていた。フランスのジョーレス提督はすでにそのことあるを予測し、同年五月中旬(洋暦・七月)、上海からアフリカ歩兵第三大隊の分遣隊二百五十名を横浜に呼び寄せ、居留地の周囲の監視・巡察に当らせた。そして六月(洋暦・八月)には、フランス駐留軍の屯所が日本政府(幕府)の負担で設営された。

へその駐屯地は、居留地とは運河ひとつを隔てた山手の、

海に面した断崖上の斜面で、そこには日本当局の骨折りで柵が営まれ、そばにフランス国旗が高々と掲げられた。この地点からは、港市や市街や、そのうしろの吉田新田を一望に見おろすことができ、監視をおこない、警報を発するには好適地であつた（洞氏前掲書）

この屯所は、現在の横浜市中区元町沿いの、大岡川と中村川が合流して海にそそぐ堀川にかかつていた谷戸橋（古地図によると、むかしの谷戸橋は現在のよりも一五〇メートルほど海寄り）のきわにあつたが、そのうしろがフランス山と呼ばれ、現在は「港の見える丘公園」の一部となつてゐる。

こうしてみると、カミユ中尉はこの年の五月に上海から横浜に移駐し、六月にはこの屯所に入つて居留地の警衛に當つてゐた、と考えてよいだろう。

しかも、この年の五月二十三日（洋暦・七月八日）、攘夷実行のために長州藩が下関海峡を通過中のフランス通報艦キンシャン号を砲撃したことにたいする報復として、六月五日（洋暦・七月二十日）、セミラミス号とタンクレード号が下関の長州藩砲台を攻撃し占領したとき、このアフリカ連隊第三大隊のうち獵歩兵一個中隊が、フレガット陸戦隊一個中隊とともに出動したのであつた。カミユ中尉もその戦闘に参加してゐたかもしれない。そのと

きの自信が、この日の無防備な遠乗りにつながつたと考へてよいのだろうか。

三

カミユ中尉遭害の報告がどういふ経路でフランス軍の横浜駐屯所に届いたのか、必ずしも明瞭でない。

「仏国士官カミユス井戸ヶ谷村ニ於テ遭害一件」中に、
「（文久三年）九月八日」の日付で書かれた「都築某ノ私録」といふ文書が収められている。

これは事件の六日後で、まだ調査が行き届いていない段階の記録のせいか、ところどころに誤りと思われる個所があるが、事件直後の記録としては一応の参考となるために収録されたのであろう。しかし、この「都築某」なる人物がどんな立場の人間か説明がなく、しかもわざわざ「私録」と断わつてゐるのも、正確さよりは便宜上のために収録した、という意味であらうか。

その内容は次のようなものである。――

「九月三日仏蘭西人馬にて東海道裏通り戸塚辺へ罷越、
程ヶ谷宿裏にて「浪人四五人」が現れて、一番あとになつたフランス人に拔身をもつて切りつけ、へ一番に手綱（てづな）持候手二本切落し其後胴躰を馬より引落し数ヶ所疵付